日本語の「やはり」とスペイン語の igual の譲歩表現

三　好　準之助

要　旨

現代日本語には「やはり」という副詞がある。この副詞には「前と同様に，ほかと同様に」などの意味があり，この意味は同等の比較表現であるという解釈が可能である。国語辞書では同様を表わすいくつかの語義が記載されているが，2ヶ国語辞書では譲歩の意味も加わっている。他方，現代スペイン語には同等比較の意味の形容詞 igual があるが，この形容詞は推測や譲歩の意味の副詞になり，話しことばで使われているという。本稿は「やはり」と igual の譲歩表現を比べて，両者に見られる類似点と相違点を探ってみた。その結果，両者とも特別な文脈情報によって譲歩の意味が表現されているが，「ヤハリ」の場合にはその表現形式の外にある文脈情報の存在で譲歩の意味が生まれており，igual の場合にはその表現形式自体から譲歩の意味が生まれていることが判明した。

キーワード：「やはり」，“igual”，譲歩，表現形式，文脈情報

現代日本語には「やはり」という副詞がある。このことばの意味やその表現の意図については様ざまな解釈が存在する。この副詞には「前と同様に，ほかと同様に」の意味があり[1)]，この意味は同等の比較表現であるという解釈が可能である。そして譲歩の意味もあるとされている。他方，現代スペイン語には同等比較の意味の形容詞 igual があるが，この形容詞は推測や譲歩の意味の副詞になり，話しことばで使われているという。本稿はヤハリと igual の譲歩表現を比べて，両者に見られる類似点と相違点を明らかにしようとする試みである。

1．ヤハリについて

日本語の副詞「やはり」（あるいは「やっぱり，やっぱ」。本稿では以下でヤハリと表記する）はどのように使われているのであろうか。

1.1. ヤハリの意味

現代日本語の基礎語を詳しく分析している森田（1977）は，その 453-4 頁でヤハリを扱っている。まず冒頭で，その用法を「現実の状況が，話し手の観念内にある基準と差がない場合に用いる」と説明し，「話し手の観念内の基準には，幾つかの種類が認められる」として，その基準を 5 種類に分けている。

1.1.1. 森田（1977）の５分類

森田の５分類を要約して紹介すると以下のようになる。

①過去の状態を基準にすえたヤハリ。取り立て助詞「も」と共起。「冬になってもやはり朝のマラソンは続けています」など。

②他の状況を基準にすえたヤハリ。「も」と共起。「皆と同様，私もやはりストライキには反対だ」など。

③現状が本来の姿であるという認識を基準にすえたヤハリ。「も」と共起することもある。「利口そうでもやはり子供だ」など。

④話し手が心に描いた状態を基準にすえたヤハリ。基準は「話し手の期待や予想，常識的な判断，思考判断」など。「やはり彼は白だった」など。

⑤外在する規則を基準にすえたヤハリ。基準は「社会の通念・法律・法則」など。「どんなに皆が否定しても，地球はやはり回っている」など。

1.1.2. 筆者の解釈

森田はヤハリの用法を「現実の状況が，話し手の観念内にある基準と差がない場合に用いる」と説明している。話し手の観念内にある基準を比較表現の基準項（第２項）とすると，それと比べられるのは比較表現の第１項として認識される情報のことである。「現実の状況」をＰ，Ｐが成立するときの第１項をＸ，「話し手の観念内にある基準」を第２項のＹとすると，ヤハリを使ってＰを表現するとき，Ｘについて認識されるＰとＹの内容に「差がない」ということになる。この表現の内容は，比較される第１項のＸと比較の基準を表す第２項のＹという２種類の項について，「ＸではＹと同じくＰである」という同等の意味の比較表現であることになろう[2)]。そしてヤハリの表現形式は，「Ｘではヤハリ（＝Ｙと同じく）Ｐである」になる。すなわち，ヤハリは同等比較の第２項である基準項Ｙの情報を内包していると解釈することができる。

Ｘは現実の状況の成立にかかわる第１項であるが，つねに表現されるとは限らない。表現されなくても文脈から推定されるであろう。森田の解釈を，彼の例文を使って検討した。その結果，筆者は以下のように解釈する。

過去の状態を基準にすえたヤハリ①の例文「冬になってもやはり朝のマラソンは続けています」なら，文脈から想定できる過去の習慣と現実の状況が比べられている。現実の状況は「冬」のことである。それゆえ「Ｘ［第１項：冬］ではヤハリ［Ｙ＝過去の状態「朝のマラソンをすること」と同じく］Ｐである［朝のマラソンは続けています］」になろう。

他の状況を基準にすえた②の例文「皆と同様，私もやはりストライキには反対だ」なら，現在の状況は「私」のことについて述べられている。「私」に関する状況が文脈から想定できる他の状況と比較されていることになる。だから「Ｘ［第１項:私］ではヤハリ［Ｙ＝他の状況「皆はストライキに反対だ」と同じく］Ｐである［私はストライキには反対だ］」になろう。

現状が本来の姿であるという認識を基準にすえた③の例文「利口そうでもやはり子供だ」なら，先行文脈に何かの情報があってこのように結論づけられている。話し手は自分の主観として，問題の人物が子供であると認識している。それゆえ，「X［第１項：問題の人物］ではヤハリ［Y ＝話し手の主観「その人物は子供だ」と同じく］P である［(その人物は）子供だ]」になるであろう。

話し手が心に描いた状態を基準にすえた④の例文「やはり彼は白だった」でも上記の③の例文と同様の判断の仕組みが推測される。話し手は自分の主観的判断から，彼が白であると認識している。現実の状況が話し手の心に描かれた状態（主観）と比べられているのである。すると，この場合も，比較される第１項として「彼」が想定される。すなわち，「X［第１項：彼］ではヤハリ［Y ＝話し手の主観「彼が白だと思う」と同じく］P である［彼は白だった]」ということになる。

そして外在する規則を基準にすえた⑤の例文「どんなに皆が否定しても，地球はやはり回っている」なら，発話時の関連情報として皆の否定が存在するものの，現実の状況と外在する規則が比べられている。外在する規則というものを，筆者は広く世間の常識であると解釈したい。現実そのものの状況が述べられているのであるから，関連情報とはかかわりなく，現実自身が比較の第１項になろう。すると,「X［第１項:現実］ではヤハリ［Y ＝世間の常識「地球は回っている」と同じく］P である［地球は回っている]」になるであろう。この場合の関連情報は P の内容と矛盾しているが，⑤の場合の関連情報は常に P と矛盾しているわけではない。たとえば「ある実験結果が発表された。地球はやはり回っている」というような，P と矛盾しない内容の関連情報も存在する。

森田の考察に従って到達した筆者の解釈では，ヤハリの表現形式は「X ではヤハリ（＝ Y と同じく）P である」になる。そしてヤハリ自身の意味内容は「Y と同じく」である。ヤハリには比較の基準項 Y の情報が内包的意味として含まれていると思われる[3)]。

以上のような筆者の検討では，比較の第２項 Y として３種類が想定される。比較の第２項は，①と②では文脈から想定される内容であり，③と④では話し手の認識（主観）であり，⑤では外在する規則（世間の常識）である。

1.1.3. 森田の基準の再分類

ヤハリの研究では，森田の５種類の基準を３種類にまとめて分類する姿勢も存在する。言い換えれば，比較の基準項の Y が，５種類から３種類にまとめられる，という考え方である。たとえば西原（1988）は，森田が基準と呼んでいるものを，そして筆者が比較の基準項と呼ぶものを，語用論的前提であるとして，つぎの３種類にまとめている。

用法 A：ヤハリは文の命題を作用域にする。そしてとりたて助詞「も」と共起して，「も」の情報追加機能を補足・強化する。話し手はその追加が妥当な論理的帰結であるという判断を確

認する。

用法 B：ヤハリは文脈全体を作用域とし，話し手は自分自身による妥当な推論の帰結を主張する。

用法 C：ヤハリは命題や文脈を超えた次元と結びつき，話し手は自身の妥当な論理的推論体系の帰結を表す。ヤハリの最も使用頻度の高い用法である。

筆者の解釈では，用法 A は森田の①と②に，用法 B は森田の③と④に，用法 C は森田の⑤に相当する。このような 3 分類は，筆者が 1.1.2. で想定した，比較の第 2 項の 3 種類と符合している。

川口（1993）は，西原の提示する 3 種類の前提を，それぞれ「客観的状況」,「話者の主観」,「社会通念・世間一般の常識」と呼んでいるし，呉（2004）は，この副詞の意味を川口と同じように，それぞれ「客観的事態」,「話者個人の考え」,「社会的通念・常識」の 3 種類に分けて統語的特徴を探っている。

1.2. 辞書のなかのヤハリの語義

ヤハリは辞書のなかでどのような語義が提示されているのであろうか。

1.2.1. 国語辞書のヤハリ

加藤（1998）は 13 種類の国語辞書に見られるヤハリの語義を検討した。加藤によると，大部分の国語辞書ではヤハリの用法が 4 種類に分けて提示されている。そのうち，3 種類はほぼ共通していて，つぎのようなものである。

I. 他のものと同様であることを示す（類義表現[4]「また，同様に」）。「（他のだれもが反対している）私もやはり反対です」など。

II. 過去の状態と同様であることを示す（類義表現「依然として，相変わらず」）。「（昨日も雨だった）今日もやはり雨だった」など。

III. 予想通りであることを示す（類義表現「思った通り，案の定」）。「（難しいだろうなと予想していた）やはりむずかしかった」など。

問題は，辞書によって説明方法の異なる第 IV の語義説明である。加藤は，用法 IV は次の 4 種類にまとめられる，としている。

A. 表現をやわらげる。「やはりこういうことだと思いますが」など。

B. 最終的な結論を表す。「酒はやはり灘だ」など。

C. 後続表現内容が「あるもの」と一致する。「彼はやはり天才だ」など。

D. 後続表現内容が「一般的な考え方」と一致する。「経験者はやはり手つきがちがう」など。

加藤は以上の 4 種類の語義説明について問題点を提示しながら検討した結果，自身は結論として，「『やはり』には，根本的な条件として，『既成の観念』を受けて用いられるという性質が

あり，従来指摘されてきた『一般的な考え』や『予想』はその『既成の観念』のあくまでも具体的な一現れとして位置づけられるべきである」と述べている（1998: 106）。

ここで加藤が述べている「既成の観念」は，筆者が本稿 1.1.1. で紹介した森田の「話し手の観念内にある基準」に相当することになろう。

1.2.2. 和独辞書・和仏辞書・和英辞書の場合

日本で出版されたヨーロッパ語対応の 2 ヶ国語辞書では，ヤハリはどのような語義が設定されてヨーロッパ語に訳されているのであろうか。たとえば，和独辞書の木村（1984）では「又，同様に」，「猶，依然」，「...に拘らず」の 3 語義が，和仏辞書の鈴木（1992）では「同じく」，「結局」，「依然として」，「にもかかわらず」の 4 語義が挙げられていて，和独辞書の語義に「結局」が加わっている。そして和英辞書の増田（1974）では，和仏辞書と同様の 4 種類の語義が挙げられている。

ここには，本稿の 1.2.1. で紹介した国語辞書の語義には見当たらない「にもかかわらず」という譲歩の意味が，3 種類の辞書に共通して示されている。

1.2.3. 和西辞書の場合

日本語がスペイン語に対応させられている辞書では，ヤハリにどのような語義が設定されているのであろうか。

（1）白水社の和西辞書：有本ほか（2001）には，4 種類の語義が対応している。「同じく」，「結局のところ」，「それでも」，「案の定」である。

（2）小学館の和西辞書：小池ほか（2014）にも 4 種類の語義が設定されているが，白水社と同一ではない。「同様に」，「依然として」，「予想どおり」，「結局」である。

（3）三省堂の和西辞書：ルビオほか（2004）には，上記 2 種類の辞書の語義がすべて揃っているうえに，それらよりも記述が詳しい。「同様に」，「たとえそうでも」，「依然として」，「思った通り」，「結局」である。

和西辞書でもまた，本稿の 1.2.1. で紹介した国語辞書の語義に見当たらない，「それでも」（白水社）とか「たとえそうでも」（三省堂）という譲歩の意味が示されている。

1.3. ヤハリの意味と用法

ヤハリについて，筆者は以上のような情報を得た。ここでそれらの情報を総合してヤハリの意味を 3 種類設定し，その様ざまな使われ方，具体的な語義を明らかにしておきたい。

1.3.1. ヤハリの意味と表現形式

森田は同等比較の基準項を「話し手の観念内の基準」と呼び，ヤハリはその基準と同じであることを表現するとする（1.1.1.）。筆者もこれがヤハリの意味であると考える。森田はその基準を5種類に分類した。しかしその5種類の基準は，西原など（1.1.3.）によれば，3種類の語用論的前提にまとめられている。「客観的状況」，「話者の主観」，「社会通念・世間一般の常識」である。これらは，筆者の解釈（1.1.2.）では比較の基準項（第2項）に当たる。筆者は比較の第2項（基準項：Y）の情報は内包的意味としてヤハリの語義に含まれている，と解釈した。本稿ではヤハリをそのYの意味内容に従って，「ヤハリ甲：（発話状況を含めた広義の）文脈情報」，「ヤハリ乙：発話者の主観」，「ヤハリ丙：世間の常識」という3種類に区別することにする。

そしてヤハリの表現形式であるが，1.1.2. の検討の結果を使えば，「Xではヤハリ（＝Yと同じく）Pである」になる。すなわち，ヤハリには比較の基準項Yの情報が語義成立の前提条件として含まれていることになる。

1.3.2. ヤハリの用法

加藤（1998）は13種類の国語辞書に見られるヤハリの用法をまとめた（1.2.1.）。それによると，ほぼ共通の3種類の用法（I. 他のものと同様；II. 過去の状態と同様；III. 予想通り）があるが，分かれるのは4番目の用法説明である。それを4種類にまとめている。すなわち，VI-A表現のやわらげ；VI-B最終的な結論；VI-C後続表現内容の「あるものとの一致」；VI-D後続表現内容の「一般的な考え方との一致」である。

これらの用法を上述した筆者のヤハリの基準項と関連付けてみよう。「ヤハリ甲：（発話状況を含めた広義の）文脈情報」は用法I「他のものと同様」と用法II「過去の状態と同様」に，「ヤハリ乙：発話者の主観」は用法III「予想通り」に対応する。では，「ヤハリ丙：世間の常識」に対応する用法はどれであろうか。それは用法VI-D「一般的な考え方との一致」であろう。では，VIのその他の用法はヤハリの表現内容（甲，乙，丙）とどのように関連付けられるのであろうか。

VI-A「表現のやわらげ」は，談話機能のことになる。この用法はヤハリの表現形式と間接的に対応しているのであろう。ヤハリ丙「世間の常識」を比較の基準にすれば，発話者はその主張が自身のものではなく，世間一般の常識であるとすることで，自身の表現の主張性をやわらげることができる。ヤハリ丙の応用であろう。西原（1988）が指摘しているように（1.1.3.），ヤハリの諸用法のなかで，特に注目されるのはこの用法である。

VI-B「最終的な結論」は，ヤハリ乙「発話者の主観」の変種的な用法であろう。発話者が熟考の末に自己の判断を下した情報も，発話者の主観を形成するからである。ヤハリの意味である比較という認識作用の存在が，このことばに話し手の熟慮の結果の表現であるというニュアンスを与えることになるのであろう[5)]。

VI-C は後続表現内容の「あるものとの一致」を表現する使い方である。これはヤハリの表現形式そのものを指しているので，ヤハリ甲にもヤハリ乙にもヤハリ丙にも相当する。分類するべき特別な用法のことではない。

1.3.3. ヤハリの意味とスペイン語

多くの国語辞書では，ヤハリは多義語として扱われている。日本語を外国語に対応させる 2 ヶ国語辞書では，その複数の語義を具体的に提示して，それぞれに該当する外国語を併記する。本稿 1.2.2. でいくつかのヨーロッパ語対応の辞書に見られるヤハリの語義を紹介した。それらをまとめて，比較の基準を手掛かりにする意味の 3 種類（甲，乙，丙）と対応させると以下のようになる。

ヤハリ甲「文脈情報」には「同じく」,「依然として」が，ヤハリ乙「発話者の主観」には「結局」,「案の定」,「予想通り」,「思った通り」が対応する。しかしヤハリ丙「世間の常識」に相当する語義が見当たらない。

具体的には，たとえば 1.2.3. で紹介した和西辞書の場合であるが，発話者の予想通りの結果になるという表現の「案の定」に como se pensaba（se imaginaba）「（直訳）人が考えた・想像したように / 考えられた・想像されたように」が（白水社），発話者の「予想どおり」の表現に（tal）como se esperaba「（直訳）人が予測したように / 予測されたように」が（小学館），発話者の「思った通り」の表現に como era de esperar [prever]「（直訳）予測するべきであったように」，como se preveía「（直訳）人が予測したように / 予測されたように」など（三省堂）が並置されている。日本語の「案の定」,「予想通り」,「思った通り」は，筆者が参照した日独・日仏・日英の辞書には含まれていないが，いずれも発話者が主体（行為者）になる表現である。しかるに，それらに対応するスペイン語では，主語なしの一般人称表現（「人は～」）とも受動表現とも解釈できる再帰代名詞（se）が使われている。再帰代名詞による一般人称表現には，その行為の主体に発話者も含まれることから，これらのスペイン語は，発話者を主体にしたものであると解釈されればヤハリ乙「発話者の主観」に対応することになるし，一般の人々を主体にしたものであると解釈されれば，ヤハリ丙「世間の常識」に対応することになる。和西辞書ではこれらの日本語をヤハリ乙とヤハリ丙に対応させていることになろう。

さらに，筆者が参照した 2 ヶ国語辞書ではヤハリの意味として譲歩の表現が含まれている。和西辞書の白水社なら「それでも」a pesar de ello, 三省堂なら「たとえそうでも」aún así, incluso así, así y todo;「それでもなお」todavía;「それにもかかわらず」a pesar de todo などである。ヤハリの譲歩の意味は，国語辞書を調べた加藤（1998）の検討結果には含まれていない（1.2.1.）。

2. スペイン語の igual について

スペイン語には igual ということばがある。

2.1. igual の現代語の意味

現代スペイン語の igual は形容詞・名詞・副詞として機能している。具体的にはどのような意味で使われているのであろうか。3 種類のスペイン語辞書を調べてみよう。

2.1.1. Gutiérrez Cuadrado

たとえば Gutiérrez Cuadrado の辞書（1996）では，その機能と意味が次のように解説されている。まず，形容詞として同等比較を表現する。

1. 性質・量・質がほかのものと同じであることを表す。Tiene cuatro camisas iguales a las mías.「（彼は）私のと同じシャツを 4 枚持っている」。

2.「瓜二つ」の意味を表す。Esa niña es igual que su madre.「あの女の子は母親と瓜二つだ」。

以下，形容詞の語義 3, 4, 5 は省略する。6 が男女名詞，7, 8, 9 が男性名詞である。そして，副詞として次の 3 種類の語義が挙げられている。

10.（口語）「おなじように」（‘igualmente’）。形容詞の副詞的用法。

11.（口語）「おそらく, たぶん」（‘quizá’, ‘a lo mejor’）。Igual aparezco por allí esta noche.「私はおそらく今夜その辺に姿を見せるよ」。

12.（南アメリカの用法）「それでも，どんなことがあっても」（‘a pesar de todo’）。

2.1.2. Lucena Cayuela

スペインとスペイン系アメリカのスペイン語を対象にする Lucena Cayuela（2002）の辞書では，語義の 8, 9, 10 に副詞の 3 種類の意味が提示されている。

8. 副詞。明示されていたり暗示されたりする複数の項の間の同等や等価の関係を指す。数字や数量などを比較するのに使われるが，状態･行為などを対置するのにも使われる。en privado no se comporta igual que en público「人は，私的には公的と同じように振る舞わない」; estos tres relojes cuestan igual「この 3 種類の時計は同じ値段である」; todo lo han hecho igual「すべてが同じように行なわれた」。

9. 口語的。主張されることを確実ではないが可能であると考える，ということを指す。si llueve, igual voy al cine「雨が降れば，おそらく私は映画に行く」; igual ya lo ha hecho y aún no lo sabemos「おそらく彼はそれをしただろうが, 私たちはまだそのことを知らない」;—Quizá tiene razón. —Igual sí「たぶん彼が正しい」「おそらくそうだ（ろう）」。注意：常に文頭に置く。同義語：quizá（「おそらく」）。

10. 口語的。障害が現れていても何かが実行されることを指す。aunque no tenga ganas, igual iré mañana a su cumpleaños「気は進まないが，それでも明日，彼の誕生日パーティーに行くつもりだ」; no te empecines en decir que no, porque igual tendrás que hacer los deberes「いやだと言い張るな。というのも，それでも君は宿題をしなくてはならないだろうから」; no vale la pena quejarse, porque el examen lo haremos igual「不平を言っても仕方がない。試験はそれでも受けるのだから」。

上記の Gutiérrez と比べれば，Lucena の 8 が 10 に，9 が 11 に，10 が 12 に相当する。

2.1.3. アカデミアの辞書

規範的な性格を帯びているアカデミア Real Academia Española の辞書では，上記の副詞 igual の用法はどのように説明されているのであろうか。22 版（2001）では形容詞や名詞の語義のあとに，つぎの 3 種類の副詞用法が挙げられている。

10. 様態の副詞。「同じ方法で，同じように」（‘de la misma manera’）。

11. アルゼンチンとウルグァイ。「それでも，どんなことがあっても」（‘a pesar de todo’），「とはいえ，それにもかかわらず」（‘no obstante’）。Aunque mañana llueva igual salimos de paseo.「明日，雨が降っても，私たちはそれでも散歩に出ます」。

12. 疑いの副詞。口語用法。「おそらく・たぶん」（‘quizá’）。Igual mañana nieva.「おそらく明日は雪が降る」。

アカデミアの辞書の 23 版（2014）では，記述に少しの違いがある。第 10 語義と第 12 語義はまったく同じであるが，第 11 語義では使用地域の指定が削除されている [6]。ところが，同辞書の 1956 年に出版された 18 版では，副詞としての語義がひとつも見当たらない。これらの 2 種類の記述の違いによって，igual の副詞的用法は 20 世紀の後半に一般化し，その南米南部における用法は現在ではその他の地域にも広がっている，と理解される可能性がある [7]。

2.2. igual の意味の拡張

副詞としての igual の表現については，筆者はすでに Miyoshi（2015）で自身の仮説を発表した。それを要約して紹介しよう。

本稿の 2.1. で示されているように，副詞の igual には 3 種類の用法がある。用法 I（本稿では igual-I と呼ぶ）:「同じ方法で，同じように」（‘de la misma manera’）（アカデミアの第 10 語義）; 用法 II（igual-II）:「おそらく，たぶん」（‘quizá’）（アカデミアの第 12 語義）; 用法 III（igual-III）:「それでも，どんなことがあっても」（‘a pesar de todo’），「とはいえ，それにもかかわらず」（‘no obstante’）（アカデミアの第 11 語義）である。筆者は，本来的に同等の比較表現をする igual-I が，推測の igual-II や譲歩の igual-III に語義拡張したのであろうと仮定している。

2.2.1. igual-I

「同じ方法で，同じように」（‘de la misma manera’）という igual-I の意味は，同等の比較表現において，基準項の存在を前提にして生まれた意味である。「同じように」という比較表現では，比較される項目（X）が特定の基準項（Y）と比較されるのであるが，その基準項の意味は含んではおらず，その存在が暗示されている。また，その比較内容は様ざまに想定される。たとえば,「その女の子は同じように歌う」という意味の例文 1a では基準項が省略されていて，なにと同じなのか，具体的な意味はわからない。しかし基準項の存在は暗示されている。それは文脈から把握される。想定可能な比較内容としては「歌い方，歌声，歌う場所，歌う時間，歌うときの服装」などがある。明示される比較の基準項を「以前」にすれば「その女の子は以前と同じように歌う」という例文 1b になり, igual を de la misma manera に置きかえると例文 1c のようになって，1b と同義の同等比較表現になる [8]。

1a. La niña canta igual.

1b. La niña canta igual que antes.

1c. La niña canta de la misma manera que antes.

2.2.2. igual-II

では,「おそらく，たぶん」（‘quizá’）という igual-II の語義はどのようにして生まれたのであろうか。『新スペイン文法』（NGLE: 45.9i）[9] によれば，基準項との同一性を表現する igual は，その比較内容として蓋然性（確率）も想定されうる。その用法は，たとえば例文 2 の表現に見られる。

2. Igual puede ser la guerrilla que el Ejército「（その集団は）軍隊にもなるしゲリラにもなる（同一の蓋然性がある）」

すなわち，igual は文副詞として [10]，比較される 2 項を同一の蓋然性という比較内容で表現することができることになる。またこの例文は，比較の基準項を省略すれば 3 のように書きかえることも可能であろう。igual は文副詞として，比較の 2 項を同一の蓋然性という比較内容で推論し，その結果を表現する。

3. Igual puede ser la guerrilla.「（その集団は）（軍隊になるのと）同じ確率でゲリラにもなる」

他方，Moliner（1998: 13）の辞書には，この igual のインフォーマルな語義について「既述のこと，仮定されること，信じられることなどに従って生起するあらゆる確率のあることに対置される，一種の可能性を指摘するために使われる表現」と定義している。ある出来事の起こる可能性が，関連するあらゆる出来事の起こる可能性と比較される，というのである。この定義に上記の NGLE の指摘を加えれば，igual が，あるひとつの場合とそれに関連するあらゆる場合という 2 種類の場合を比較し，その比較される 2 項が同一の蓋然性を持っている，ということ

になる。Martín Zorraquino（2011: 401）はこの解釈に言及しつつ，この疑いの副詞 igual は焦点表示の副詞として働いている，と指摘している。

また Matte Bon（2005: 259）も同じように，口語で直説法動詞の前で使われる igual の使用は，話し手が，可能ではあるが蓋然性は低いと考える出来事を，あらゆる可能性を考えているということを示すために採用する方略である，としている。

そこで筆者は，igual が文副詞として使われている例文 4 が，たとえば 5 のような比較構文から成立するのではないかという仮説を提示した。比較表現の副詞から同一の蓋然性を表現する副詞になり，複数の選択肢のなかのひとつを表示するという焦点表示の副詞になるが，蓋然性は疑いの意味を含んでいるので，口語では「たぶん」という意味の用法が一般化したと考えられる [11)]。

4. Igual vendrá Juan mañana.「たぶん，ホアンは明日来るだろう」

5. Juan vendrá en este caso（mañana）igual que en todos los demás casos posibles.「ホアンはこの場合（明日），あらゆる他の可能な場合と同じように（同じ確率で）来るだろう」

例文 5 は，統語的には 2 項を比べる同等比較の構文であるが，ひとつの場合とそのほかの全ての可能な場合との比較であるから，複数の選択肢のなかからひとつを特化する焦点表示が可能になっている，とも言える。

別の例文を出して，筆者の仮説を説明しよう。Di Tullio（2012: 100）は，igual-II はスペインで使われる疑いの副詞であるとして，例文 6 を提示している。筆者はその後半の文が例文 7 のような同等比較の構文から生まれたのだと考える。

6. Está lloviendo a cántaros. Igual <‘tal vez’> no vamos a la fiesta.

「土砂降りの雨である。（私たちは）おそらくパーティーに行かない」

7. No vamos a la fiesta X（‘está lloviendo’）igual que Y（en todos los demás casos posibles）.

「（私たちは）X（雨が降っている）の場合，Y の場合（その他のあらゆる可能な場合）と同じ確率で，パーティーに行かない」

すなわち，比較の第 1 項である X のときの状況 P は，比較の基準である第 2 項の Y の場合と同じ蓋然性で起こるのである。そして蓋然性を問題にすることから疑いの意味が表現される。

なお，X のときの状況である P「我々はパーティーに行かない」は，X の概念「雨が降っている」と常識的に矛盾しない。「雨が降っている」という情報は「パーティーに行く」には不都合な条件である。P は「パーティーに行かない」であるから，「その他のあらゆる可能な場合」もパーティーに行かないときの状況を指すことになるであろう。

例文 4 でも 6 でも，比較の基準項 Y は文面に現れない。しかしその存在は暗示されている。比較される第 1 項 X は P の成立に関わる情報であるが，4 では P に含まれる mañana「明日」であり，6 では先行文脈の情報「土砂降りの雨」である。第 1 項 X は P の文中に現れることもあり（例文 4），現れないこともある（例文 6）。igual が推測の意味を表現するときの意味の成立

に関する筆者の仮説に従えば，igual-II の表現形式は，「X では igual（＝ Y と同じ確率で）P である」になろう。そして X の情報は，P の実現と矛盾していない。

筆者の解釈では，ヤハリの表現形式は「X ではヤハリ（＝ Y と同じく）P である」であった（1.1.2.）。比較の第 1 項 X を含む現実の状況 P が，比較の基準項 Y が意味する内容と同じであることを表現する。ヤハリは「X のときに認識される P［現実の状況］が Y ＝「話し手の観念」と同じ内容であること」を表現するのに対して，「X では igual（＝ Y と同じ確率で）P である」という igual-II では，「X のとき Y ＝［全ての状況］と同じ確率で P が起こること」を表現している[12]。ヤハリは Y（話し手の観念）を含んでいて P がそれと同じ内容であることを表現し，igual-II は Y（全ての状況）を暗示していて P がそれと同じ確率で起こることを表現している。

2.2.3. igual-III

igual の用法 III（igual-III）は「それでも，どんなことがあっても」（‘a pesar de todo’），「とはいえ，それにもかかわらず」（‘no obstante’）という譲歩の意味を表現する。

Di Tullio（2012: 100）は igual-III を「アルゼンチンのスペイン語に見られる譲歩表現の小辞」として扱い，その典型的な使い方として用例 8 を提示している。そして，譲歩の意味を表現しているので，譲歩の対象になる概念が先行文脈に存在しなくてはならないが，それゆえこの用法の igual は談話の始点の位置を占めることができないし，igual-II と同様，比較の基準項は省略されている，と観察している。

8. Está lloviendo a cántaros. Igual <‘aun así’> vamos a la fiesta.　「土砂降りの雨である。私たちはそれでもパーティーに行く」

すなわち，比較表現の第 1 項（X）に相当する情報は先行文脈のなかにあり，第 2 項（基準項，Y）は省略されているから，igual-III の場合，igual を含む文には，比較の第 1 項も第 2 項も表現されていない，ということになる。

筆者は，この表現を成立させる仕組みは igual-II と同じような同等の比較表現であると仮定する。igual-III の場合の同等比較表現は，igual-II と同じく，同一の蓋然性を比較内容にした焦点化の表現になっている。そうすると用例 8 の後半の文は 9 のように言い換えられる。

9. Vamos a la fiesta X（‘está lloviendo’）igual que Y（en todos los demás casos posibles）.「（私たちは）X（雨が降っている）の場合，Y の場合（その他のあらゆる可能な場合）と同じ確率で，パーティーに行く」

視点を変えれば，Y「その他のあらゆる可能な場合」は意味的に「X でない場合」のことであるから，no-X と言い換えることができる。そうすると 9 は 9’ のように言い換えられる。

9’. Vamos a la fiesta X（‘está lloviendo’）igual que no-X（‘no llueve’）.「私たちは X（雨が降っている）の場合，no-X の場合（雨が降らない場合）と同じ確率で，パーティーに行く」

ただし，igual の同一の蓋然性を比較内容にする igual-III は，igual を含む文の内容「我々は

パーティーに行く」が X の概念「雨が降っている」と常識的に矛盾している場合に成立する。

Di Tullio（2012: 101）は igual-III が文脈依存度の高い使い方であると論じている。先行文脈に igual を含む文の内容と常識的に矛盾する情報がなければ成立しないからである。そしてその矛盾する情報は，たとえば Di Tullio の次の 3 例では，以下のように見られる。

10. Aunque está lloviendo a cántaros, igual vamos a la fiesta.「土砂降りの雨ではあるが，私たちはそれでもパーティーに行く」

11. Corregí varias veces el trabajo, pero igual no se entiende.「私はその仕事を何度も正してやった。しかしそれでも理解してくれない」

12. ¡Qué desastre! Corregí varias veces el trabajo; e igual no se entiende.「なんてことだ！私はその仕事を何度も正してやった。そしてそれでも理解してくれない」

筆者は次のように仮定する。譲歩の意味を表現する igual-III では，igual-II と同じように比較の基準項（第 2 項，Y）は igual が暗示していて，文面に現れない。そして比較される第 1 項 X は先行文脈の情報である [13]。譲歩の意味が成立するには，上述のように，先行文脈の情報 X は，igual とともに表現される文 P の概念と常識的に矛盾する情報でなければならない。

igual-II の表現形式は「X では igual（＝ Y と同じ確率で）P である」であった。そして X の概念は P の成立と矛盾しない（2.2.2.）。他方，igual が譲歩の意味を表現する igual-III の表現形式は，その意味の成立に関する筆者の仮説に従えば，igual-II と同じく「X では igual（＝ Y と同じ確率で）P である」だが，譲歩の意味が成立するには，X の概念は P の成立と矛盾することが条件になる，ということになろう。そうすれば，igual-III は igual-II の変種であることになる [14]。

すなわち igual は，「おそらく」のような推測の意味を表現するときも（igual-II），「それでも」のような譲歩の意味を表現するときも（igual-III），Y（その他の全ての可能な場合）の存在を暗示している。igual-III のときにはその表現形式の内部で X と P との常識的な矛盾関係によって成立しているから，その譲歩の意味は igual 自身の意味である，ということができる。

2.3. igual-III の使用実態

この譲歩の意味の用法は，先行文脈の情報と igual で表現される文の間に矛盾のあることを条件にする使い方である。とはいえ，そのような矛盾の有無は話し手が常識的に判断して決めることである。文脈の情報を考慮しても，なかなか十全な検討をするのは難しい。

本稿 2.1.3. で紹介したように，用法 III はアルゼンチンやウルグァイで使われるということなので，その点を考慮して CREA で検索していたら，偶然，マラドーナ Diego Armando Maradona が自伝を語る資料が見つかった。アルゼンチン（ブエノスアイレス州出身）の世界的に有名なサッカー選手である。そしてこの作品には日本語の翻訳も出版されている。スペイン語版（筆者が参照したのは文庫版で，本文 369 頁）の igual / Igual を CREA で検索し，日本語版（本文

440 頁）の訳文も参考にしながらこの副詞の使い方を検討してみた。

CREA によれば，スペイン語版では igual が 90 回使われている（igual の語形で 62 回，Igual の語形で 28 回）。本文と訳文を手掛かりにして igual-III を探したら，筆者の検討では 90 例のうちの 19 例がこの用法であった（igual の語形で 13 回，Igual の語形で 6 回）。たとえば，

13. Después perdimos, *je*, pero igual fue todo muy lindo.[15)]

「（そんなことを思っていたら）結局，僕らは負けたけど，それでもとても楽しかったよ」

14. estaba preocupado, muy dolorido, pero igual iba a jugar;[16)]

「とても不安だったし痛かったけど，プレーするつもりだった」

15. Sí, no me dejaba hablar con un periodista especial, José María García, que lo criticaba mucho a él. Yo igual hablaba, con García,[17)]

「そう，ホセ・マリア・ガルシアという，ヌニェスを批判ばかりしていた記者とだけは話すなと命じられたんだ。それでも僕はしゃべったよ。ガルシアとも，」

16. pero yo en ese momento no entendía razones. Igual yo viví el mundial como un argentino más[18)] .「そのときは理由がちっともわからなかった。それでも僕は，あのワールドカップをひとりのアルゼンチン人として楽しんだよ」

である。19 例のうち 10 例で igual は pero「しかし」と共起している [19)]。日本語版で igual-III の譲歩の意味に対応する日本語は，「それでも」が 9 例で最多であり，そのほかに「～でも，～のに，～けど，とはいえ，といっても」などがある。

ところが，igual-III と同じような構文でも，譲歩ではなくて，igual の単なる述語修飾副詞である igual-I「同じように」に相当すると思われる使い方が，8 例で見られた（例文 17 のように igual の語形で 1 例，18 のように Igual の語形で 7 例）。日本語版では「いずれにせよ」や「いずれにしろ」と訳されている [20)]。たとえば次の 2 例である。

17. porque perdimos por penales... Pero igual, estábamos en la lucha grande.[21)]「PK 戦で負けてしまったからね。でもいずれにせよ，ビッグなタイトルを狙っていたんだ」

18. Igual la bronca recién se me fue dos días después,[22)]

「いずれにしろ怒りがおさまったのは二日後［...］のことだった」

「いずれにしろ」のように訳されている場合には，先行文脈に譲歩の対象となる情報が含まれていない。それゆえ igual-III として解釈することができない [23)]。

3. ヤハリと igual の譲歩表現

3.1. 譲歩表現とは

言語表現における「譲歩」という術語は，どのように理解すればいいのであろうか。筆者は，たとえば大塚ほか（1982: 240）の言い方を参考にして，譲歩表現とは「ある事柄を述べる際に，

それと相反するまたは結びつかない付随的な事柄を，容認すべきこととして加える」表現であると理解する。

この「相反するまたは結びつかない付随的な事柄」を容認するという意味を，寺村（1991: 134-5）は別の言い方で説明している。寺村は「X デモ」の表現を扱う際に，「雨でも決行する」というときの「譲歩のデモ」について，「或る条件（A）が成立すると，当然その帰結として B ということになる，という推論を想定し，その推論を否定する意味をもって使われる」と説明する。この説明は，「A なら B だ」が否定されて「A でなくても B だ」になるという意味であろう。すなわち，「A なら B だ」と「C なら B でない」という命題があって，「A でなくても（= C でも）B だ」という内容が譲歩の意味を表現することになる。「雨でも決行する」の場合，A が「晴天」，B が「開催する」，C が「雨天」ということになろう。「A［晴天］でなくても（= C［雨天］でも）B だ［開催する］」ということになる。

譲歩の意味を「A でなくても（= C でも）B だ」の表現であるとすれば，譲歩の意味の副詞を文（「B だ」）に加えて表現するとき，その文の意味と相反するまたは結びつかない付随的な事柄，すなわち，B の内容と矛盾する意味の表現（C）を容認すべきこととして文脈上に先行させる，ということになる。すなわち，［C：B と矛盾する内容の先行情報＋副詞＋ B］という表現形式になるであろう。

3.2. igual の譲歩表現

本稿の 2.2.3. で明らかになったように，igual- III が表現している意味は譲歩であり，「それでも」などの日本語に相当する。この用法は，方言的ではあるものの（2.1.3.），同等比較を表現する igual が，igual を含む文の内容と文脈の先行情報とが常識的に矛盾するときに成立する。辞書にも登録されているこの igual- III の語義の成立については，筆者は仮定的に一応の説明を試みた。ここで，2.2.3. で提示された以下の 3 種類の例文を，上記の［C：B と矛盾する内容の先行情報＋副詞＋ B］という表現形式に照らして検討してみよう。

10. Aunque está lloviendo a cántaros, igual vamos a la fiesta.「土砂降りの雨ではあるが，私たちはそれでもパーティーに行く」

11. Corregí varias veces el trabajo, pero igual no se entiende.「私はその仕事を何度も正してやった。しかしそれでも理解してくれない」

12. ¡Qué desastre! Corregí varias veces el trabajo; e igual no se entiende.「なんてことだ！私はその仕事を何度も正してやった。そしてそれでも理解してくれない」

10 なら［C：B と矛盾する内容の先行情報（土砂降りの雨）＋ igual ＋ B（パーティーに行く）］に，11 なら［C：B と矛盾する内容の先行情報（何度もの訂正）＋ igual ＋ B（理解されない）］に，12 なら［C：B と矛盾する内容の先行情報（何度もの訂正）＋ igual ＋ B（理解されない）］になるであろう。

さらにこれらの例文を，筆者が提案する igual-III の表現形式「X では igual（＝ Y と同じ確率で）P である」で説明すれば，10 なら［X：P と矛盾する内容の先行情報（土砂降りの雨）＋ igual（＝ Y と同じ確率で）＋ P（パーティーに行く）］に，11 なら［X:P と矛盾する内容の先行情報（何度もの訂正）＋ igual（＝ Y と同じ確率で）＋ P（理解されない）］に，12 なら［X:P と矛盾する内容の先行情報（何度もの訂正）＋ igual（＝ Y と同じ確率で）＋ P（理解されない）］になるであろう。表現形式の内部で譲歩の意味が生まれている。

igual-III のときには，igual の表現形式の内部で X と P との常識的な矛盾関係によって成立しているから，その譲歩の意味は igual 自身が表現する意味である，ということができる。それゆえ譲歩の語義が辞書に登録されている。

3.3. ヤハリの譲歩表現

他方，ヤハリについては，本稿 1.2.1. で見てきたように，国語辞書には譲歩の語義は提示されていない。ところが日本語をヨーロッパ語に訳す 2 ヶ国語辞書では，本稿 1.2.2. や 1.2.3. で紹介したように，「にもかかわらず」に類する譲歩の語義が提示され，それに相当する訳語が示されている。国語辞書には登録されていない語義が 2 ヶ国語辞書には提示されているのである。

ヤハリが譲歩の意味を表現するということについては，たとえば森本（1994: 132-3）は次のように説明している。例文 19 では，ヤハリは「期待通り」の意味になるが，例文 20 では，結果は話し手の期待とは反対になる。

19.「山の天気はどうでしたか」「天気予報では雨になると言っていました。やはり午後から雨になりました」

20.「結果はどうでしたか」「行けるかなと思ったんですが，やはりだめでした」

そして次にように説明する。「『やはり』を使うのに関与する『期待』とは，言語的にははっきりと述べられてはいないが，話し手の心の中にある何かである。ここで可能な解釈は，その『期待』は，この言語的文脈自体から引き出されるものだけではなく，話題になっているものについての話し手の見解，社会的に認められた知識，慣習といったものをも含む，一般的な原則のようなものだということである」。そこで例文 20 では，話し手は「自分では成功を望んだが，自分の能力などについての総合的な理解から，失敗が予想されていたと想定するのである」。

森本の解釈を本稿 1.3.1. で提示されたヤハリの表現形式に沿って説明すれば，例文 19 のヤハリはヤハリ甲「文脈情報」になる。そして譲歩の意味の例文 20 のヤハリはヤハリ乙「発話者の主観」に相当する，ということになるのであろう。例文 20 のようなヤハリの使い方は，ヤハリを含む文の内容と文脈の先行情報とが常識的に矛盾するときに成立することになる。その先行情報を，森本は「期待」と判断している。そして「その『期待』は，この言語的文脈自体から引き出されるものだけではなく，話題になっているものについての話し手の見解，社会的に認められた知識，慣習といったものをも含む，一般的な原則のようなもの」だと断じている。筆

者はこの「期待」という考え方を受け入れることができない。

譲歩の意味のヤハリは，ヤハリ甲でもヤハリ乙でもヤハリ丙でも，まず，なんらかの同等比較の基準項 Y が存在していて，それと比べられる比較の第 1 項 X を含む P（現実の状況）について「X ではヤハリ（＝ Y と同じく）P である」という表現形式があり，この表現形式の外部の情報として，ヤハリを含む文 P と矛盾する情報が先行文脈に含まれているときに成立するのである。森本の断定では，その「期待」と呼んでいる情報は，矛盾する先行情報であると同時に比較の基準である Y のことでもあることになる。ヤハリが譲歩の意味を表現するのは，たとえば，試験の結果を問う例文 20 の返答を利用すれば，21a ならヤハリ甲（文脈情報）＋ヤハリを含む文と矛盾する先行情報（私の期待），21b ならヤハリ乙（発話者の主観）＋ヤハリを含む文と矛盾する先行情報（親の期待），21c ならヤハリ丙（世間の常識）＋ヤハリを含む文と矛盾する先行情報（皆の期待），ということになる。

21a. 先生はだめだと言っていました。私は行けるかなと思ったんですが，やはりだめでした。

21b.（自分に実力のないことはわかっている。でも，今回は必死に勉強した。）親は行けるぞと言ったんですが，やはりだめでした。

21c.（自分は及第点を取ったことがない。常識では受かるはずがない。でも，今回は必死に勉強した。）友だちは皆，今度は行けるぞと言ったんですが，やはりだめでした。

また，矛盾する先行情報は「期待」だけに限らない。たとえば例文 22 はヤハリ乙の表現であるとすれば，「発話者の主観」（パーティーには行くべきだ）が比較の基準項 Y であって，X「私たち」に関する現実の状況 P が表現されるのであるが，その表現形式に，先行文脈の情報として，ヤハリで表現される文 P「私たちはパーティーに行く」と矛盾する状況（土砂降りの雨）が加わっている。

22.（土砂降りの雨なら，常識的には外出しない。）土砂降りの雨ではあるが，ヤハリ私たちはパーティーに行く。

ヤハリの表現形式は「X ではヤハリ（＝ Y と同じく）P である」であった（1.1.2.）。この基本的な形式に，譲歩の意味を表現するときの上記の形式を当てはめれば，「P と矛盾する内容の先行情報＋（X では）ヤハリ（＝ Y と同じく）P である」ということになろう。すなわち，「P と矛盾する内容の先行情報」は，ヤハリの表現形式に含まれていないことになる。

他方，曺（2001）は順接と逆接の論理からヤハリの機能を探っているが，たとえば例文 19 のようなヤハリを「順接における『やっぱり』の機能」と，そして例文 20 のようなヤハリを「逆接における『やっぱり』の機能」として論じている。しかしこの順接・逆接という意味のつながりは，ヤハリが内包する同等比較の 2 種類の項（第 1 項と第 2 項）とヤハリの文との関係ではなくて，ヤハリを含む文の内容とそれに先行する情報との関係を指している。ヤハリの表現形式として生まれる意味ではない。それゆえヤハリの意味を説明していることにはならない。

例文 20 のような文脈のヤハリはヤハリ甲・ヤハリ乙・ヤハリ丙のどれにも起こる，文脈依存の用法である。この譲歩の意味を表現すると解釈されるヤハリは，ヤハリの同等比較の表現形式の外に，ヤハリの文の情報と矛盾する先行情報が存在するときに成立して，igual- III に類似する意味を表現している，ということになる。具体的には，本稿 1.1.2. で検討した森田の 5 番目の基準⑤「外在する規則を基準にすえたヤハリ」で示されている例文「どんなに皆が否定しても，地球はやはり回っている」がわかりやすい。ヤハリ自体の表現形式は，「X［現実］ではヤハリ［Y ＝外在する規則「地球は回っている」と同じく］P である［地球は回っている］」になるが，この表現形式に，P の内容と矛盾する先行情報［皆の否定］が加わっているのである。

ヤハリは甲・乙・丙のどの用法でも，文脈情報によって譲歩の意味とつながることがあるので[24]，国語辞書には，敢えてそのような語義が登録されていないのであろう（1.2.1.）。しかし 2 ヶ国語辞書ではヤハリの語義のなかに譲歩の意味が含まれている（1.3.2., 1.3.3.）。

4. おわりに

同等比較の意味の副詞が譲歩の意味を表現すると解釈されることがある。日本語のヤハリやスペイン語の igual である。この両者の使い方を検討した結果，以下の点が判明した。

igual は 3 種類の意味を表現するが（2.1.），譲歩の意味の igual-III の表現形式は，igual を含む文を P とすれば，「X では igual（＝ Y と同じ確率で）P である」であり，X が P の成立と矛盾する内容であることが条件であった（2.2.3.）。他方，ヤハリは基本的に「X ではヤハリ（＝ Y と同じく）P である」という形式で表現するが（1.1.2.），譲歩の意味を表現するときの形式は「P と矛盾する内容の先行情報＋（X では）ヤハリ（＝ Y と同じく）P である」であった（3.3.）。両者が譲歩の意味を表現するときには，先行文脈の情報に依存して成立し，口語で使われるという共通点がある[25]。

しかし両者には相違点がある。ヤハリが譲歩の意味を表現すると解釈されるのは，ヤハリの表現形式の外にある先行情報が，ヤハリを含む文の内容と矛盾しているときである。ヤハリ自体の語義として認定することは難しいであろう。他方，igual が譲歩の意味を表現するときには，その表現形式のなかの第 1 項 X とこの副詞を含む文の内容 P が矛盾している。譲歩は igual 自身の語義である。それゆえ方言的色彩が強いとしても，スペイン語辞書のなかで語義のひとつとして明示されている（2.1.）。

ヤハリの場合，ヤハリ自体が譲歩の意味を表現することはない。譲歩の意味は，あくまで，文脈上の別の情報の存在から生まれている。このことから，国語辞書ではヤハリに譲歩の意味が加えられていないのであろう。それにもかかわらず，日本語とヨーロッパ語の 2 ヶ国語辞書ではヤハリに譲歩の意味が加えられている。この現象の背景には，日本語とヨーロッパ語の 2 ヶ国語辞書の編纂における一種の慣習が存在するのではなかろうか。その慣習を生んだのは，た

とえばヘボンの『和英語林集成』([1886] 1980: 730）が考えられる。ヘボンではヤハリに Still, yet, also, too, likewise という英語が対応しているが，still, yet は譲歩の意味の副詞だからである。とはいえ，本稿ではこの現象の存在を指摘するだけにとどめ，この点に関する考察は別の機会に譲りたい。

注

1）新村（2008）では，ヤハリに二つの語義が示されている。「もとのまま。前と，または他と同様に」と「思ったとおりに」である。
2）板坂（1971a: 217）は，ヤハリということばは「古い比較法の系統をひくものである」と指摘している。
3）森田の説明では，X は「現実の状況」である。筆者は暫定的に X を以上のように設定した。しかし③・④では，⑤と同じように，X を「現実」とか「事実」とすることも可能ではなかろうか。
4）「類義表現」という指摘は筆者が加えた。加藤にはその指摘がないが，加藤はそれらの表現がヤハリと同じようには使えないことを指摘しているからである。
5）森本（1994: 135）は,「やっぱり行きます」という用例に関連して「『やっぱり』は到達した結論が状況について熟慮した結果であるということを示すシグナルとして機能する」と述べているが，蓮沼（1998: 137）はこの森本の指摘を受けて，その機能がヤハリの談話機能のひとつであるとしている。そしてその機能について,「先行文脈の情報，あるいは話者が前提とする知識との照合を行った結果，当該の結論がそうした情報･前提的知識に根拠づけられた妥当な結論だという話者の認識的態度，発言態度を表示する機能である」と解釈している。
6）さらに例文には igual の前にコンマが置かれている（Aunque mañana llueva, igual salimos de paseo)。
7）Cornillie（印刷中：第 1 節）は,「おそらく」の意味の igual は 20 世紀の後半頃から使われ始めたと指摘しているが，論拠は明示されていない。
8）本稿の用例の番号や下線は，引用先のものではなく，筆者のものである。
9）本稿では NGLE の引用箇所を，頁数ではなくて，このように章（45）・節（9）・項（i）で指す。
10）文副詞としての igual は，動詞の前に置かれるという条件がある。DPDD（2005: 352）は，この場合の igual が（文頭ではなくて）直説法の動詞に前置されるとして，Tu hermana igual necesita ayuda.「君の妹はおそらく助けを必要としている」という例文を挙げている。
11）NGLE（2009: 30.11n）によれば，疑いの副詞も焦点表示の副詞に特徴的な振る舞いを見せる。
12）なお，igual では確率が問題になるから疑いの意味で使われるが，ヤハリでは概念の同一性が問題になるから，疑いの意味は生じない。
13）それゆえ Di Tullio（2012: 100）は igual-III のとき X も Y も省略されていると考えている。筆者もそのように考えるが，Y は igual によって暗示されていると仮定する。
14）ただし igual-III の場合には，問題になる確率は疑いの意味を表現することはない。
15）CREA 版 24 頁，文庫版 29 頁，日本語版 27 頁。訳文は日本語版のもの。
16）上記の注 15 と同じく，177, 211, 247-8。
17）注 15 と同じく，78, 95, 108。
18）注 15 と同じく，32, 38, 38。
19）pero「しかし」+ igual の組み合わせ全体で「それでも，しかしながら」という譲歩の意味が表現されている。この組み合わせで使われている igual が，その後，単独で譲歩の意味を表現し始めたという可能性があるかもしれない。
20）国語辞書の北原（2002）では，「いずれ」の第 4 語義が「(『―にしても』『―にしろ』『―にせよ』の

形で，副詞的に）幾つかの条件はつくが，どれをとったとしても。どちらにしても」と定義されている。この比較表現は，スペイン語なら tanto X como Y「X のときも Y のときも（同じように）」に相当する。X igual que Y「Y の場合と同じく X の場合に」とは異なり，比較の 2 項を同時に考慮していることになる。とはいえ，本稿の 2.1. で見てきたように，スペイン語の副詞 igual の現代語の意味としては「いずれにせよ」に相当する語義が提示されていない。筆者は，「いずれにせよ」に相当する igual の用法はさらなる検討が必要であるとしつつも，暫定的に，igual-I「同じように」の変種の用法であると解釈しておく。

21）注 15 と同じく，90, 109, 126。

22）注 15 と同じく，37, 44, 45。

23）Maradona の場合, igual-II であろうと解釈される用例は見当たらなかった。17 や 18 のような「いずれにせよ」と訳されている用例のなかに，「おそらく」と訳される場合があるのであろうか。

24）たとえば，ヤハリ甲なら「冬は寒いけど，やはり朝のマラソンは続けています」などが，ヤハリ乙なら「事件当初は黒だとされたが，やはり彼は白だった」などが考えられる。

25）ヤハリについては板坂（1971b: 93）が，その口語的特徴として，「やはりには話し手の謙遜の気持ちがこめられているため，対話の場での特定の聞き手に対する心的態度を示す機能が強く，一般読者・一般聴衆に対しての言葉として使われにくいということも見逃すことができない」と述べているし，igual については本稿の 2.1. で口語用法の指摘がみられる。

参考文献

有本紀明ほか（2001）『和西辞典』，白水社。

板坂元（1971a）「日本語の生態 7 やはり・さすが」，『国文学解釈と鑑賞』，36 巻 1 号，pp. 216-221。

板坂元（1971b）『日本人の論理構造』，講談社現代新書。

大塚高信ほか（1982）『新英語学辞典』，研究社。

加藤薫（1998）「『やはり』に先行するもの」，『文化女子大学紀要。人文・社会科学研究』，6，pp. 97-107。

川口良（1993）「日本人および日本語学習者による副詞『やっぱり』の語用論的前提」, 日本語教育学会『日本語教育』，81，pp. 116-127。

北原保雄（編）（2002）『明鏡 国語辞典』，大修館書店。

木村謹治（1984）『和独大辞典』，博友社（1937 年版の復刻版）。

小池和良ほか（2014）『小学館 和西辞典』，小学館。

呉珠熙（2004）「前提を持つ副詞『やはり』の統語的特徴」，韓國日本文化學會『日本文化學報』，22，pp. 99-114。

新村出（編）（2008）『広辞苑』第 6 版，岩波書店。

鈴木信太郎（監）（1992）『スタンダード和仏辞典』，大修館書店。

曺再京（2001）「順接と逆接の論理からみた『やっぱり』の機能について」, 東北大学文学部日本語学科『言語科学論集』，5，pp. 37-48。

寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味』第 III 巻，くろしお出版。

西原鈴子（1988）「話者の前提――『やはり（やっぱり）』の場合――」，『日本語学』，1988 年 3 月号，pp. 89-99。

蓮沼昭子（1998）「副詞『やはり・やっぱり』をめぐって」，吉田金彦（編）『ことばから人間を』，第 X 章（pp. 133-148），昭和堂。

ヘボン，J. C.（1980）『和英語林集成』，講談社（英語の題名は A Japanese-English and English-Japanese Dictionary。初版は 1886 年に出版）。

増田綱（編）（1974）『新和英辞典』，研究社。

森田良行（1977）『基礎日本語　意味と使い方』，角川書店。

ルビオほか（2004）『クラウン和西辞典』，三省堂。

Cornillie, B.,（印刷中）, “Acerca de la locución epistémica *tal vez* en el siglo de las Luces: innovación y especialización”, en Peter Lang（dir.）, *Márgenes y centros en el español del siglo XVIII*.

Di Tullio, A. L.（2012）, «Igual: un comparativo sin igual», en M. Giammatteo *et al.*（eds.）, *Léxico y sintaxis*, Capítulo 4, Mendoza, Editorial FFyL-UNCuyo y SAL. 93-105.

DPDD: Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española（2005）, *Diccionario panhispánico de dudas*, Madrid, Santillana.

Gutiérrez Cuadrado, Juan（dir.）（1996）, *Diccionario SALAMANCA de la lengua española*, Madrid, Santillana（coedición con la Universidad de Salamanca）.

Lucena Cayuela, Núria（dir.）（2002）, *Diccionario de uso del español de América y España*, Barcelona, Spes Editorial.

Martín Zorraquino, M. A.（2011）, «Juan vendrá igual mañana（que vino ayer）/ Igual vendrá Juan mañana...», en Escandell Vidal, M. V. *et al.*（eds.）, *60 problemas de gramática dedicados a Ignacio Bosque*, Madrid, Ediciones AKAL. 400-405.

Matte Bon, F.（2005）, *Gramática comunicativa del español*, Tomo II, Madrid, EDELSA.

Miyoshi, Jun-nosuke（2015）, «Sobre los usos adverbiales de *igual*», en Instituto Cervantes de Tokio, *Actas de los Congresos Internacionales sobre el español y la cultura hispánica,* 125-135.

Moliner, M.（1998）, *Diccionario de uso del español. I-Z*, 2.ª ed., Madrid, Gredos.

NGLE:（2009）: Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española, *Nueva Gramática de la Lengua Española*, Madrid, Espasa Libros.

Real Academia Española（2014）, *Diccionario de la lengua española*, 23.ª ed., Barcelona, Espasa Libros（その 22 版は 2001 に Espasa Calpe, Madrid から，18 版は 1956 年に同出版社から発行）。

資料体

マラドーナ（2002）『マラドーナ自伝』，幻冬舎（監修：金子達仁，訳者：藤坂ガルシア千鶴）。

CREA: *Corpus de referencia del español actual*. Real Academia Española. <http://www.rae.es>. Fecha de consulta 5.9. 2015.

Maradona, D. A.（2005）, *Yo soy el Diego de la gente*, Buenos Aires, Booket（edición original: 2000, Planetas）. CREA が使っているのは Planetas の単行本，筆者が参照したのは Booket の文庫版，日本語版の底本は Planetas の版）。

Concession expressed by Japanese YAHARI and Spanish *igual*

Jun-nosuke MIYOSHI

Abstract

The adverb YAHARI in Japanese means 'as before', 'like the rest', etc., and these meanings can be related to the comparative expression of equality. In Japanese dictionaries we can find several meanings of equality, and in Japanese and occidental language dictionaries we can find these and the meaning of concession as well. On the other hand, Spanish word *igual* is originally an adjective that expresses the meaning of equality, and has extended his grammatical function to adverb, expressing the meaning of conjecture 'perhaps', and that of concession. We endeavor in this article to compare the similarity and the difference in expressing concession between these two adverbs, YAHARI and *igual*. We conclude that in both cases the meaning of concession can be expressed thanks to a special contextual meaning, that YAHARI itself does not have the meaning of concession, and that *igual* can express this meaning as one of his own meanings.

Keywords: YAHARI, *igual*, concession, expression form, contextual meaning